The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	源俊頼の歌学知識と和歌実作
Author(s)	佐藤, 明浩
Citation	詞林. 1993, 14, p. 15-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67337
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

源俊頼の歌学知識と和歌実作

佐藤　明浩

一

源俊頼に次の詠作がある（1）。

　　修理大夫顕季の樋口にて恋のこころを

わかれにしたつかのゆみのしらとりをきのかはゆすりこひぬ日ぞなき（散木奇歌集　一二〇一）

一方、俊頼は『俊頼髄脳』（2）に三首の歌、

あさもよひきのせきもりがたつかゆみゆるすときなくまづゑめるきみ

たつかゆみ手にとりもちてあさかりにきみはたちきぬたなくらのゝに

あさもよひきのかはゆすりゆく水のいつさやむさやいるさやむさや

を掲げて、次のような注説を記している。男が大事にしていた女が弓を形見に残して、姿を消した。月日を経て弓は「しろき鳥」となり南の空高く飛び去るが、行く先を尋ねると紀伊国に至って再び人となった。「さて此歌はそのをりによみたりけるとぞ」というのである。「わかれにし」の俊頼歌は、この話を知ることによって、はじめてその意味が納得される。とくに「たつかのゆみのしらとり」が自分の許を去って行った女性を表していることなどは、『俊頼髄脳』にあるような注説の知識なしには理解できない。

『散木奇歌集』を読んでいると、右のような、『俊頼髄脳』に意味を説いている言葉を俊頼が和歌の実作に用いている例をしばしば見かける。これらについては、たとえば小峯和明氏の『俊頼髄脳』に関する三部作（3）の各論文の初めに関係する俊頼の和歌が列挙されているし、小川豊生氏（4）、山田洋嗣氏（5）の諸論にもいくつかの俊頼歌が問題にされている。本稿では、それらを含む先学の成果に導かれつつ、改めて俊頼の歌学知識と和歌実作との関係を問題にしたい。

『俊頼髄脳』には、遡る文献に未見の古歌がいくつも採り上げられ、それにこれも本書に初めて見える〈物語〉をもって注

説を加える例がきわだっている。忠実の女勲子に献上されたといわれる本書が、饒舌とも思える多弁さをもってこれらの注説を書き連ねていったのはなぜか。それは院政期における和歌文学の史的状況のどのような側面を指し示しているのか。本稿では、『俊頼髄脳』所載の歌学知識と、俊頼自身の実作との関係を検討し、それを通して、こうした問題について考えたい。

二

はじめに、『俊頼髄脳』において問題にされ、注釈を加えられている語句が、どれくらい俊頼の実作に用いられているのかを一覧しておきたい。まず、『俊頼髄脳』の「異名」を記してある部分の後、すなわち小学館版日本古典文学全集『歌論集』(6)でいえば一二〇頁「(一一)季語・歌語の由来」の部分以降、末尾までを対象として(7)、そこに注の付けられている語句を検出した(底本は静嘉堂文庫蔵「無名抄 俊頼」)。そして、俊頼がそれらの語句に拠る歌をどれほど詠んでいるかを調査した。次頁の表は、その結果を一覧したものである。「語句」は『俊頼髄脳』の対象となる語句、「頁」はその語句について記してある部分を前記『歌論集』の頁数によって示したもの、「俊頼歌」はその語句に拠る『散木奇歌集』中の歌の番号(新編国歌大観による)、なお、「永」は『永久百首』の略である。問題の語句が直接詠み込まれていなくても注説と密接に関わる場合は、これを掲げている(楊貴妃、王昭君など)。また、注説ととくに関わらない場合でも、その語句が詠み込まれているものも、機械的に採ってある(たとえば、「あやめ」は「ひとつのくちなはの名なり」と『俊頼髄脳』に説いているが、これに該当する俊頼歌は見出せない。この場合でも、いちおう「あやめ」を詠んだ俊頼歌の番号を掲げた)。ただし、これに該当するのは他に「たなばた」くらいである。

暫時の調査ではあるが、おおよその事情は把握できるであろう。私に対象とした『俊頼髄脳』の語句・注説は全部で一八五項目ある。そのうち俊頼が実作に用いているもの、すなわち表に一覧されている項目は、九七項目と半数以上にのぼっている。いま、他に比較する明確な数字を呈示できないが、俊頼は自ら注説を施している語をかなり積極的に実作に用いていることは確かめられるであろう。

これらのうち、冒頭に掲げた「たつかゆみ」の例などは、『俊頼髄脳』の注説と彼の実作とがよく合致しているといえる。ところが、注説と実作との関係はこのような場合ばかりではない。その関係に問題が含まれていると思われるものについて、しばらく検討していきたい。

三

『俊頼髄脳』に、「とよはたぐも」「くものはたて」から

語　句	頁	俊頼歌
あけ	191	1353・(855) (1481)
あけのそをぶね	193	1318
あなし	122	622・760・(1567)
あまのいしぶね	193	1002
あやめ	234	284・285・286・287・288・289・290・291・292・293・694・762・830・831
いささめ	180	986・1411*
いせのはまをぎ	181	1404*
いなごまろ	207	1609
いなむしろ	139	445
うきぎ	159	1525
うさかのもり	140	856
うずのたまかげ	189	279
馬鹿	157	1346
うまのつまづく	147	1062・1142
うらしまのこ	176	1394
おいらく	190	30*
おしね	214	162・475・1423
おにのしこくさ	126	419
おほふね	194	804
おほをそどり	170	513・1520
かぞいろ	149	251
かつみ	181	157・1370・1520
かづらきのかみ	152	854・1005・1268・永459
かみかぜ	181	1180
かやりび	185	345・346・347・348
かるも	249	1133
きのまろどの	170	212
くもで	133	10・226
くものはたて	132	904
くれはとり	156	304・525
けけらなく	178	931
けふのほそめの	135	201
こころあひの風	122	1128
こしあめ	122	160
こや	163	318
さやのなかやま	178	733・734*
しでのたをさ	184	230
しながどり	149	776・1040・永445
しなへたる	178	26・976・1013・1143・1175・1199・1488・1520
しのに	192	1004
しののをふぶき	122	327
しのぶもぢずり	173	902・1352
すがる	184	457
せり	173	(27*)・74・987・1518・1600
そのはらふせや	172	452・1063
たかさご	206	129・812
たつかゆみ	128	1141・1201・1264
たななしをぶね	193	1006
たなばた	195	379・380・381・382・383・384・385・386・387・388・389・390・1089・1090・1280・永234
たのき	214	1423
たのむのかり	143	152・432
たまえ	180	289・317・691・1370・1521
たまきはる	141	1255
たむけぐさ	137	691
ちくまのまつり	140	857
ちびきのいし	212	727
つきのねずみ	130	496
つま	232	148・375・443・447・450・453・530・634・1140・1153・1211
にしきぎ	134	606・1009
にひくはまゆ	156	1283
にへす	123	1303・1304*
ねらひ	178	1105・1342・1439
のもりのかがみ	124	(1125)・人麿影供和歌
はす	236	312・364・365・916・990
はなちどり	184	1447
はにふのこや	122	638
ははきぎ	172	452・1063
ははこ	248	148
はまちどり	184	621・622
はもりのかみ	189	518
ひたちおび	141	745・746*
ひぢかさあめ	121	1087
ふすゐのとこ	249	1133
ほととぎすは鷺の子	129	251
みけし	156	379・永136
みさえだ	187	674
みぞれ	121	632
みのしろころも	155	120
みもすそがは	181	720
みやまおろし	122	229・440
むまをうしといふ	247	1605
もがみがは	236	359・1406・1518
もず	152	230
もずのくさぐき	183	1403
楊貴妃	240	383
やつはし	133	226
やまかたつきて	179	615・943
ゆふだち	120	343・344
ゆふつけどり	185	258*・259・862
よどの	248	286*
王昭君	234	永634
わがせこ	231	990・1021・1184・永192・永297
わすれぐさ	126	1014
をののえくつ	209	1084
をのへ	206	129
をばすてやま	177	531・947・1379・1380
をろのはつを	150	1115

・「あなし」の(1567)は異本の本文にみえる（冷泉家本「あなし」）。その他（　）を付した歌は、参考程度にとどまるもの。
・*印を付した歌は他人詠。

「くもで」へと及ぶ一連の叙述がある（一三一～一三四頁）。まず、

わたつみのとよはたぐもにいり日さしこよひの月よすみあかくこそ

夕さればくものはたてにものぞ思ふあまつそらなる人こふる身は

の二首を掲げ、次のように注している。

「とよはたぐも」といふも、「くものはたてに」といふも、おなじことなり。日のいらんとするときに、にしの山ぎはにあかくさま〳〵なるくものみゆるが、はたのあしのかぜにふかれてさはぐにたるなり。はたといふは、つねにみゆる佛の御まへにかくるはたにはあらず。まことの儀式にたて、たゝかひの庭などにたつるはたなり。

「とよはたぐも」と「くものはたて」を、いずれも日没時に赤く見える、「はた」の形状に似ている雲だと言う。さらに「はた」は、仏の荘厳具としての「幡」ではなく、正式の宮中行事に用いる仗旗、戦場の軍旗の「旗」であると説明している(8)。ここで注目したいのは、「くものはたて」の語句が用いられた次の俊頼の実作である。

観無量ず経文十六想観いらんとする日をみて仏のみくにをおもふ

色色の雲のはたてをかぎりにている日や弥陀のひかりなるらん（九〇四）（9）

日想観を詠んだ歌で、「入る日」を「弥陀の光」だと観じている。ここでは、「雲のはたて」が「仏」に縁のあるものとして詠まれている。「はた」は仏の「幡」にあらずとする先の『俊頼髄脳』の注説と照し合せると、噛みあっていないという印象を受ける。ここでも俊頼歌の「雲のはたて」の「はた」は「旗」であって、掛詞として「幡」の意味をも持ち、「弥陀のひかり」と縁語関係を成しているとすれば、いちおうの説明はつくであろう。しかし、「くものはたて」は「幡」ではなく「旗」であるという説を堅持しようとするならば、このような詠み方はしないほうが無難であると思われる。注説と実作の間にズレを認めることができるだろう。

『俊頼髄脳』は、前引部分の後に「わたつみの」「ゆふされば」の二首に解釈を施し、さらに、「これをまた、くもといへるむしの手八あれば、そのくものいへは、手（イ軒）にみゆる、手をくみたるやうにみゆれば、それによそへてよむなり。これも事のほかのひがことにはなきにや」と述べている。「くものはたて」はまた「蜘蛛の巣」をも言うと展開するのである。続いて源重之の一首を例証として「むかし（虫歟）の手をもくもでと云はんにとがなし」と、蜘蛛の足をも「くもで」と言い得ることを示す。

さらに、次の二首を掲げ、「八橋」および「くもで」に言及する。

こひせじとなれるみかはのやつはしのくもでに物をおもふ

ころかな
もろともにゆかぬみかはのやつはしを恋しとのみやおもひわたらん

これに注して、「八橋」は通常の橋ではなく、湿地にあちらこちら渡した板であって、必ずしも八つあるわけではないが、「いひよきにつきて八橋とはよみにけるにや」と言う。『綺語抄』には「みかはのやつはしは、はしらのやつあれば、くものあしやつあるによそへてよめる也とぞ。されども、さはなくて、はしのやつありけるとぞ。」と、二説を掲げるが、いずれにしても、「八」はその通りの数を表しているという理解である。俊頼がこれを念頭に置いていたかどうかはわからないが、少なくとも結果的には、『綺語抄』の二説に対して、さらに異説を立てていることになる。

続いて「くもで」について、次のように言う。

雲でといへるは、はしのしたに、よはくてよろぼひたふれもぞするとて、はしらをたよりにて、木をすぢかへてうちたるをいふなり。それははしにのみた（うイ）つにはあらず。たなゝどのあしのよはくてたふれぬべきにもうつめれば、くもでといふ物はさだめもなし。彼八橋には雲手た（う歟）つべしともきこえねども、橋といへるにひかされてよめるにや。ふるき哥はさやうに(イのみ)こそはよむめれ。（イ此比ならば、そのはしにくもでなしとやいはん。）

「くもで」とは橋脚などの補強材であることを説き、「八橋」には「くもで」は無いのだが、「橋」の縁で「八橋のくもで」と詠んだのであろう、それは「古き歌」の読み方だと述べている。そして、さらに、

又、いたをさだめもなくをきちらしたるさまのくもでにたれば、よそへてよめるにや。

と、別の説を提示して、「八橋」「くもで」に関する叙述を閉じる。「又」以下は、八橋の様子が「くもで」に似ているという、「八橋」と「くもで」の関係づけについてのもう一つの見解を示している。ここにいう「くもで」は、これに先立つ「くものはたて」→「くもで」の説明の中で触れられていた「蜘蛛の巣」あるいは「蜘蛛の手」の意味で言っていると考えてよいであろう。

確認しておくと、「八橋」を「ただ板をさだめたることもなく所々にうち渡し」た状態であるとした上で、「八橋」と「くもで」の関わりについて、次の二様の理解が示されていた。

（1）「くもで」は、橋などの補強材で、実際は「八橋」に「くもで」を打つことはないが、「橋」の縁語として関わる。

（2）「八橋」の形状が「蜘蛛手」＝蜘蛛の足（あるいは「蜘蛛の巣」）に似ているという関係にある。

では、実作において俊頼は「くもで」をどのように詠んでいるのだろうか。『散木奇歌集』から二首を掲げる。

百首歌中に霞をよめる

波たてる松のしづえをくもでにてかすみわたれるあまのは

しだて（一〇）

（殿下にて、郭公の歌人人よませ給ひけるに）

ほととぎすまちしわたらばやつはしのくもでのかずに声をきかばや（二二六）

一首目は、天の橋立における春霞の景。波の立っている海岸に、並び立っている松、その松の下枝を「くもで」として、霞が橋を渡るというように、あたり一面霞わたっている天の橋立よ。およそこのような意味に解されよう。霞を擬人化しつつ、天の橋立を橋に見立てている。ここでいう「くもで」は、『俊頼髄脳』に述べていた、橋脚の補強材の意味にほかならない。

もう一首は、ほととぎすを待つ心を「やつはしのくもでのかずに声をきかばや」と表現している。「波たてる」の歌が、「くもで」の語を詠みながら、「八橋」とは何の関係もないとみられるのに対して、この歌では「八橋のくもで」と詠んでいる。「くもでの数に」―一度だけでなく数多く―ほととぎすの声を聞きたい、というのである。この「くもで」は、「蜘蛛手」の意味、すなわち『俊頼髄脳』の（2）の見解に即して理解するとよくわかる。

『俊頼髄脳』では「八橋のくもで」について二様の見解を掲げているが、どちらが正しいというような判断は示されていない。その「くもで」に関して、俊頼が二様の見解それぞれの意味に拠る歌を詠んでいる点は注意すべきであろう。注説が複数あるとき、そのそれぞれに拠る実作がものされている例である。

また、『俊頼髄脳』で「やつはしのくもで」という表現について「古き歌」の詠み方だと述べ、「此比」以下の異文注記（10）を採用すると、「この頃」の歌ならば「その橋にくもでなし」と詠むだろうと言っている。それにもかかわらず、「ほととぎす」の歌では、「やつはしのくもで」と詠んでいるのは、注説と実作の間の齟齬ともみられる。

ちなみに、『俊頼髄脳』に注説のない語句であるが、「むろのやしま」も俊頼によって二つの意味に用いられている。

（摂政殿下にて十首の歌よませ給ひけるにつかまつれる）

煙かとむろのやしまをみしほどにやがても空のかすみぬるかな（九）

歳暮の歌とてよめる

さらひするむろのやしまのことこひに身のなりはてん程をしるかな（六八三）

「むろのやしま」については、たとえば元永元年（一一一八）十月二日『内大臣家歌合』の判詞に言及がある（この歌合は俊頼・基俊の両判）。恋・一番左「たえずたくむろのやしまのけぶりにもなほたちまさるこひもするかな」（摂津）について、基俊の判に「むろのやしまと云有ゝ」。一は下野にむろのやしまと云所あり。一は人の家にかなえにむろぬりたるをよめりとぞ、或ふみにみえたる」（『袋草紙』所引本文）とあり、（1）下野国の名所、（2）家の竈、という二つの理解が当時存した

ことがわかる。先の俊頼歌「煙かと」は、春霞の叙景歌であり、（1）下野国の名所の景を詠んだものである。一方、「さらひする」の歌は、後に顕昭が『袖中抄』『散木集注』で注記しているように、（2）竈として「むろのやしま」を詠み込んでいると考えられる。ひとつの語句について二つの理解があり、そのそれぞれに基づいた歌が詠まれている例である。なお、俊頼は前述の『内大臣家歌合』の判で、「かのむろのやしまは、まことに火をたくにはあらず。野中にしみづのあるが、けのたつが煙とみゆるなり。それをたくといはむことかたし」と、名所としての「むろのやしま」の実態を示して、左歌を批判している（ただし、結果的には左歌を勝とする）。ここには、（2）の説への顧慮はまったく窺われない。歌合判の言辞を不変の見解とみることには問題があるが、「まことに火をたくにはあらず」とする判詞の説明と竈を詠む「さらひする」の実作との間に、齟齬が存することは注意しておいてよいだろう（11）。

四

『俊頼髄脳』の注説と俊頼の実作が、明らかに矛盾している例も指摘できる。

炎王光仏

ならくかのそこまでさせやけけらなくほにてるひかりやみもけすがに（九三一）

この歌にみえる「けけらなく」については、『俊頼髄脳』に「かひがねをさやにもみしかけゝらなくよこほりふせるさやのなか山」（12）の古今集歌を掲げ、

此哥にけゝらなくといふは心なしといふむかしの詞也。彼甲斐国の風俗也。

と注している。この古今集歌の「けけらなく」を「心無く」の方言とするのは、現代に至るまで定説的見解となっている。ところが、先の俊頼歌「ならくかの」の「けけらなく」は「心無く」の意には解し難い。当該歌は「十二光仏」それぞれの光明を賛美する歌の一首で、「炎王光仏」の光明が地獄の闇をも消し去るほどであることを詠んでいるとおぼしい。その「光」を形容するのに、「心無く」ではいかにも不相応である。ここで参考になるのが、俊頼より後のものではあるが、藤原教長『古今集註』である。古今集三〇番歌の注に次の一節がある。

アヅマノウタノナカノ甲斐哥ニ「カキガネヲサヤニモミシカケケレナク」トイヘル、「カクレナク」トヨメルナリ。カキクケコ、マタヲナジ五音ナルニヨリテ、カクカヨハシヨメリ。

ここでは「けけれなく」を「隠れなく」の意に解している。先に触れた歌の主旨からすれば、俊頼歌「ならくかの」の「けけらなく」は「隠れなく」の意味で用いられているとみるのが至当である。教長以前にもこのような見解が存し、俊頼はそれに拠って詠んだと考えられる。そして、それは『俊頼髄脳』に言

うところとは別説であった。これは、注説と実作の間に矛盾を来たしているとみられる例なのである。

この場合、『俊頼髄脳』に「けけら」の意味を説いた時期と、「ならくかの」の歌を詠んだ時期（具体的には不明）とが隔たっていて、俊頼の見解に変更があったという可能性を考えれば矛盾とまではいえないかもしれない。ただし、その場合も、たとえば『俊頼髄脳』では「けけらなく」を「心無く」の意だと説いたが、後年、「隠れなく」との理解があるという情報を得て興味を覚え、さっそく実作に取り込んだというような事情を想定し得る。ここには、自説を固持していこうとするのではなく、別の説を見聞すれば触手を伸ばして取り込み、それに拠って詠作しようとする意欲が刺激される、そのような状況を窺うことができると思う。

五

次に、「つま」をめぐる注説と実作についてみていきたい。『俊頼髄脳』に「をとこはめをわがせこといひ、女はをとこをわがせこと申すなり」と言い、例証したのち、「つま」に言及している（二三二頁）。

「つま」にぞ、めといふ文字をかきたれば、をとこと申しにくけれ。それも、をとこを「つま」とよめる哥、あまたあり。

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれり
われもこもれり

この哥も、いせものがたりに、をとこ、女をぬすみてむさしのをゆくに、この野にはぬす人こもりて、野をやかむとしけるとき、女のよめるとかけり。

けさはしも思はむ人はとひてましつまなきねやのうへはいかにと

これは、式部が保昌にすてられてなげき侍けるとき、雪のあしたによめる哥なり。これらをみれば、をとこをもなどかよまざらむと、人申けん。なほ、「つま」とは〔女〕なり。

わがかどの（にイ）ちど〔り〕しばなくおきよ〳〵わがひとよ（に本）づま人にしらせじ

これも女の哥なれば、さだめもなし。

この部分の叙述には屈曲がみられ、必ずしも俊頼の意見がはっきりと主張されていないという印象を受ける。初めに、男を「つま」と詠んだ例歌を掲げ、「つま」は女も男も指す言葉であるという見解が主張されるかにみえる。しかし、途中に「なほ、つまとは女なり」と、これに対立する言説が現れ、最後は「さだめもなし」と、男をも「つま」と言うことを認ているようでありながら、必ずしも明確ではない。

ここで併せ考えるべきは、逸書『後拾遺問答』にみえる俊頼の父経信と後拾遺集撰者藤原通俊とのやりとり（『袋草紙』

『袖中抄』所引）である。『後拾遺集』草稿本に収められていた、前掲『俊頼髄脳』にも引く和泉式部歌「けさはしも」について、経信が「女歌にはつまとはよてみてんや」と問い、女性が夫を「つま」と呼ぶことに疑義をはさんでいる。これに対する通俊の答は、「男は女をつまといひ、女もをとこをつまといふなり」と明快で、例証として「むさしのは」の伊勢物語歌（前掲『俊頼髄脳』にも所引）を挙げている。この答に対して経信は「猶問」う。一応、通俊の言の理を認めながら、伊勢物語歌については別様の理解の可能性を提示し、なお男を「つま」と言うことについては懐疑的である。この難の故に通俊はこの和泉式部歌を削除したとおぼしく、現行本『後拾遺集』にはみえない。ちなみに、後年、藤原清輔は九条兼実に、万葉集を調べれば男女とも「つま」と言うことは明らかなのに、彼らが知らなかったのは「尤遺恨事也」と語っている（『玉葉』安元三年正月十二日）。

この問答は先の『俊頼髄脳』の叙述に影を投げかけているであろう。俊頼は別のところで「をとこはめをつまといひ、めはをとこをつまと云にや」（八八頁）と記しており、夫をも「つま」と言うと考えていたと思われる。しかし、前掲箇所で、「けさはしも」の歌に問題が及ぶと、経信の言説に配慮してであろう、「なほ、つまとは女なり」と言うのである。あるいは、このやや錯雑とした叙述は、経信説を視野に収めながら書き連ねていくなかで、俊頼自身の見解と区別がつかない形で経信の説が入り込んだしまった結果生じたとも考えられる。いずれにせよ、父経信の説をないがしろにはできないという配慮が存することは確かであろう。

さて、「つま」の語を用いた俊頼の実作を検すると、多くは「妻」の意で詠まれている。ところが、次のような例もある。

秋たちていくかもあらぬに、風ひやかにものこころぼそくおぼえければよめる

秋風や涙もよほすつまならんおとづれしより袖のかはかぬ

（三七五）

雨中恋

ひまもなくもりくるあめのあしおとをわがとほづまとおもはましかば（一二一一）

「秋風や」の歌は『千載集』に入っている。その新日本古典文学大系の脚注（松野陽一氏担当）に、「○つま　端緒。「訪れ」の縁語で「夫」、「袖」の縁語で「褄」をかける」、「屋根の軒先（つま）にまで延びる荻の葉先に先ず訪れる秋風の寂寥感をいいつつ、一向に訪れようとしない恋人の喩えに「飽き」をかけた「秋風」をおく」とある。掛詞としての用法ではあるが、この歌では、「つま」を「夫」の意で用いているのである。

「ひまもなく」の歌は、雨中に恋人の訪れを待つ女の立場での詠であろう。間断なく聞こえるあの雨脚の音が、遠くからやって来る「つま」＝「夫」の足音であったならばいいのに、という来ぬ人を待つ女の嘆息である。この「遠づま」も男を指し

て言っていると考えられる。

俊頼の当時にあっては、歌学書の記述や「つま」の用例から推して、「つま」は専ら女性である「妻」を指すのが常識であったようで、「夫」をも意味しうるというのは、すでに知識の上での問題であったであろう。その中で、俊頼が上記の二首のごとく、男を「つま」と呼ぶ、女性の立場での詠を残しているところには、曖昧さを残していた『俊頼髄脳』の記述よりも、よほどはっきりと彼の見解が現れている。逆に言えば、父経信の言説をある程度尊重するがために、注説においては、男女を問わず「つま」と言うのだと断言することは憚られたけれども、「つま」を「夫」の意味でも用い得るという歌ことばとしての可能性を捨て切れず、実作に及んだと考えられるのである。俊頼にあっては、経信の言を家説として継承していこうとする意識よりも、歌ことばの可能性を拓いていこうとする意欲の方がまさっていたということができる。

六

『俊頼髄脳』に採り上げられるような難義語の類や、故事に基づく言葉が、しばしば当時の贈答歌に用いられているのを見出す。まず、『俊頼髄脳』に注説のみえる語句に関する例を挙げておく（いずれも『散木奇歌集』）。

＊にへす（一二三頁）

隆源阿闍梨七条房に申すべきことありてたびたびまかりけるに、いたはる事ありとてあはざりければかみさうじにかきつけ侍りける

こりはてぬにへのはつかりあさにするやどにもあらで人かへしけり（一三〇三）

かへし　阿闍梨

はつかりのにへのひるげのつかなりとほかけぞすべきいかがかへさん（一三〇四）

＊ひたちおび（一四一頁）

常陸守経兼がくだり侍りけるに、さうぞくしてつかはしける帯にむすびつけて侍りける

なぞもかくわかれそめけんひたちなるかしまのおびのうらめしのよや（七四五）

かへし　経兼

別るとも思ひわするなちはやぶるかしまのおびのなかはたえせじ（七四六）

＊もずのくさぐき（一八三頁）／はまをぎ（一八一頁）

伊勢に侍りけるころたよりにつけて修理大夫のもとにつかはしける

とへかしなたまぐしのはにみがくれてもずの草ぐきめぢならずとも（一四〇三）

返し

しらずやは伊勢のはまをぎ風ふけばをりふしごとにこひわ

たるとは（一四〇四）

それぞれについて詳述する余裕はないが、「ひたちおび」の例は、常陸国へ赴任する友人に餞別として贈った帯に添えた歌であり、折を得たものといえる。日常会話の延長上にある、機知を効かせたやりとりである。

難義語「もずの草ぐき」を詠み込んだ「とへかしな」の俊頼歌には、「たまぐし」の語が用いられているのも注意される。『奥義抄』に「たまぐしとは、さかきを云ふ也。大神宮の風俗也」とあり、榊を言う伊勢神宮特有の言葉とされている。これに応ずるように、修理大夫顕季の返歌には「伊勢のはまをぎ」が詠まれている。「はまをぎ」が伊勢における「葦」の呼称であることは『俊頼髄脳』にも述べられている。このように、歌学書に採り上げられるような知識を媒介として、しばしば歌のやりとりが行われている。相手がこうした言葉について知っているか、また、どう理解しているかを試みる気持ちがありながら、それでもおそらくそれを受け止めてくれるであろうとの信頼の上に立って歌を贈り、それに対して贈られた側も相応の対応をするという、知的応酬をみてとれるであろう。

むつきの七日、中宮亮仲実がもとへ、ななくさのな、
つかはすとてよめる

をかみ河むつきにはゆるゑごのうねをつみしなへてもそこのみためぞ（二六）

返し　仲実朝臣

心ざしふかきみたににつみためていしみゆすりてあらふねぜりか（二七）

この一対の贈答に関しては山田洋嗣氏の詳細な論考（13）がある。山田氏は、俊頼が問題の歌語「ゑぐ」をめぐる「知的挑発をおこない」、相手の仲実も「機知的な切返しで応じた」ために、難解な贈答になっていると考え、それは「たがいの親愛と信頼に支えられたものであっただろう」とする。先に挙げた贈答歌も、このような知的興味と相互信頼の上に成っているとみられる。

俊頼を離れても、たとえば『頭輔集』に、

火きりとて、近江より貢御にまゐらするもちひは、国司のれうはことにおびたたしくておほきにて、人人のきようずるを、前左衛門佐基俊君のもとへやるとて

よしあしもきよきかがみぞてらすなるこころのほどはこれにてを見よ（六九）

かへし

はしたかの野もりのかがみならねどもよそなる人のこころをぞ見る（七〇）

という贈答があり、基俊の返歌に、歌学上問題にされていた「のもりのかがみ」が詠まれているといった例を確認できる。なお、基俊歌では、「のもりのかがみ」を、この語句の注説としてやがて主流になっていく、鷹狩にちなむ「野中の水」であるとする説ではなくて、人の心を照すという「徐君の鏡」をい

うとの説に拠っている(両説とも『俊頼髄脳』にみえる)。さらに、こういった歌学上の知識に拠る詠作が、「月のねずみ」(14)を詠み込んだ、

よの中はかなくきこゆるころ、左京権大夫俊頼朝臣のもとにいひつかはしける

かたらばや草葉にやどる露ばかり月のねずみのさわぐまに

まに(基俊集 九一)

のような、しみじみとした、やや深刻な内容の贈歌にまで及んでいることも注意される。

『俊頼髄脳』に注説はみえないが、次のような贈答歌もある。

あそび侍りける所にて隆源阿闍梨いたくねぶりければ、かはらけさすとてかける

おひしげるねぶりのもりのしたにこそめざましぐさはうべかりけれ(一三三三)

この俊頼歌には万葉集の語「めざましぐさ」が用いられている。

「季札挂剣」の故事に拠る俊頼詠、

つくしに侍りけるころ、肥後守盛房が「剣身のよきありたまはん」と申しけるがおともせざりければ、「いかに」と尋ねけるに、「忘れにけり」と申すを聞きてよめる

なきかげにかけけるたちもあるものをさやつかのまに忘れはてける(一三四三)

「咸陽宮」の故事を踏まえた、『散木奇歌集』にみえる、

修理大夫行宗が往生要集をかりてかきうつしけるを、ほどへにけりとてしきりにこひかへされけれど、かきはててとおもひていひつかはしける

樊於期が荊軻にかうべかしけるもさこそはつひにかへさざりける(一三八二)

かへし　修理大夫<三宮御製云云>

燕丹が深き意を尽せばぞ於期も首を蘇りよけん(一三八三)

という贈答など、中国故事にちなむものもある。ことに、後者の漢土の人名を詠み込んだ贈答は、和歌はやまとことばのみで詠まれるものであるという通念のなかにあって、大胆なやりとりであったといえる。これらも、前述の『俊頼髄脳』に注のみえる語句を詠み込んだ場合と同様の意識の上に成り立っているとみられる。そして、このような贈答の機会は、歌人たちが難義語や故事に関する説を語り合う場と連続するものであったと考えるのである。

七

『散木奇歌集』にみえる次の詠は、俊頼たちの<難義語>に関する意識を示唆するところがある。

はなかつみといへる事をある人のよみたりけるを、いかにいふことぞとたづねければ、ようもしらぬ事をしりがほにいふと聞えければ心のうちに思ひける

しぎのゐるたま江におふるはなかつみかつよみながらしらぬなりけり（一三七〇）

「かつみ」は、『俊頼髄脳』にも注があって、陸奥国で「こも」のことを言うのだと記されている。ある人がこの語を歌に用いたので、どういう意味で詠んだのか尋ねてみると、よく知りもしないことを知ったかぶりをして言ったのだと答えたという。これを聞いて「心のうちに」思い描いた歌は、さかしらから出た勇み足を皮肉った嘲笑的内容とも受け取れる。しかし、「ようもしらぬ事をしりがほにいふ」と言ってのけられる雰囲気があったことにも留意する必要があるだろう。

『俊頼髄脳』の「きのまろどの」について述べた部分に、藤原惟規の逸話を載せている。惟規が大斎院選子内親王の女房のもとへ忍んで行ったところ、侍たちに不審者としてとじ込められてしまった。大斎院がこれを聞いて、彼は歌詠みだと聞いているので許してやるよう命じる。許された惟規が、退出する際、「かみがきは木の丸どのにあらねどもなのりをせぬは人とがめけり」と詠んだのを、大斎院が「あはれがらせ給て」、「此木の丸殿といふことはしか〳〵きゝてし事なり」と語ったその由来を、女房から伝え聞いた惟規は、「此事よみながらとし比おぼつかなかりつることを、きゝあきらめつる」と喜んだという。この話を、俊頼は、惟規を先祖とする「もりふさ」の談として記している。惟規は紫式部の兄で、俊頼の当時には往古の人であったが、俊頼にすれば、こうした話は同時代にも往々にしてあることとしてと思い合わせながら、書きつけたのではないだろうか。

意味を熟知していない難義語でも、とりあえず歌に詠み込んでしまうことがあったらしい。さらに、それをきっかけとしてその語の意味について正確な情報を得ることができる場合もあったという。そして、それはとくに咎め立てられる行為ではなかったようだ。前掲「しぎのゐる」の歌を詠んだ俊頼にしても、ようも知らずに「はなかつみ」を詠んだある人を微笑ましく見つめる気持ちが根底にあったと考えるほうが実情に近いのではないか。

また、『散木奇歌集』に次のような連歌がある。

ようもしらぬ事をとへば、えしらぬよし申すを聞きて

肥後君

難義をばかりにも人のいはぬかな

つく

せりつみにしてよをしすぐせば

俊頼の付句は、『散木奇歌集』に載せる、せり摘む男の「物語」に拠っていると思われるが、それについてはいまは措く。前句は、ある難義語の意味を問うたところ、あっさり「知らない」と答える俊頼に対して、「難義」でよく知らないことはいっても、とりあえず思いつきでもいいから何か言ってくれてもよさそうなものなのに、という気持ちを表現したものと考えられる。詳しい正確な説でなくてもいいから、「かりに」「言う」

ことが求められているのである。これは、当時の〈難義語〉について語る場の雰囲気を示唆しているであろう。時間をかけて厳密で慎重な考証をするよりも、とりあえず間に合わせでいいから、語ることが求められた。たとえそれがその場の作り事であってもよかったのかもしれない。そのような言談の場を想定し得ると思うのである。

八

以上に述べ来ったことを踏まえて、俊頼当時の歌語注説と和歌実作の関係、およびその背景となる歌人の意識、態度について私見を述べて結びとしよう。俊頼は当時歌学の上で問題とされた語句を積極的に実作に取り込んでいた。ここに、歌ことばを拡張していこうとする意欲が看取される。新しい表現の可能性を模索していた当時の和歌の史的状況にあって、歌ことばを拡張することはひとつの大きな課題であった。俊頼たちの世代はそれに積極的に取り組んでいったといえるだろう。ことに、ひとつの言葉について複数の注説が存在するとき、そのそれぞれに拠る歌を詠むことのあった俊頼の姿勢は、その意欲の旺盛であったことを示している。そして、歌ことばに注説を施すという行為そのものが、そうした実作への利用を意識している面があることを確認しておく必要があるだろう。難義とされる語を歌に詠むには、何らかの意味づけが必要で、そうした語をある位置に繋ぎ留めるのが歌学書などでの注釈行為であったとみることもできる（15）。

彼らの注釈行為は、しばしばひとつの言葉について複数の注説を林立せしめる結果となる。その事情については、小川豊生氏の諸論に詳しい（16）。本稿でみてきたなかでいえば、「八橋」について『綺語抄』と『俊頼髄脳』が別説に立っていたごとくである。その林立は『俊頼髄脳』というひとつの書物の内部にもしばしばみとめられる。そして、提示された複数の注説について、どれが正説なのかという判断が示されていない場合も見受けられる。「くもで」の例がそうであったし、『俊頼髄脳』の「のもりのかがみ」について述べた条では、二説を記した後、「いづれかまことならん」と判断に至らず放置されている。別稿（17）で検討した「かはやしろ」でも、結局結論が示されぬまま終わっている感がある（ただし、この語は、俊頼の実作に用例が見出せない）。彼ら、少なくとも俊頼にとって、いかなる説が正しいのかということは、第一の関心事ではなかったのではないかと思われる。ただし、どれが正しい注説なのかということがまったく問題にされなかったというわけではなく、たとえば「かやりび」（一八五～一八六頁）については二説を掲げて、いずれが正しいかを求めようとする筆致が顕著である。また、「僻事」に陥ることへの警戒感と批判意識が存することも確かである。たとえば、「とぶ火の野守」について「春日野」以外の「ほかの野に詠みたらばひが事にてぞあるべ

き」（一八七頁）と言うごとくである。しかしながら、これはまた、語句の意味づけや詠み方が「僻事」でないので認められると許容することと表裏を成している。第三節で検討した一連の叙述を振り返ってみると、「雲の旗手」「豊旗雲」の意味を述べ、「蜘蛛の巣」をも「くものはたて」と言うことについて「これも事のほかのひがことにはなきにや」と認め、さらに「虫の手をくもでと云はんにとがなし」と「蜘蛛手」の言い方を是認し、橋の補強材としての「くもで」の説明へと及んでいく。ある語について意味づけをしておいて、また別の理解もあると示してこれを認め、それについては別の言い方もあると提示してこれも認めていく―こうした連鎖で叙述が進められているのである。これを実作の側からみると、こういう詠み方が可能である、また別の詠み方も可能であると、次々に用語、表現の可能性が開示されいることになる。「僻事」に陥ることを回避しつつ、用語、表現の可能性を見出していこうとする思考の軌跡をここに辿り得ると思うのである。「僻事」を非とする意識と緊張関係を持ちつつも、歌ことば拡張の意欲は言葉の意味づけを拡散する方向へと導いていった（18）。その結果、『俊頼髄脳』という同一の書の中でさえ、注説が増殖し、林立していったのだと考える。

新しい歌ことばを拓いていこうとする意欲が、俊頼の場合、家説を尊重する意識をも圧していたらしいことは、第五節に述べたとおりである。俊頼が当代きっての文人であった経信の男であることを自ら侍みとし、その教説を継承しようとする姿勢のあったことは、『俊頼髄脳』にも窺われる。しかし、彼の珍しさを希求する心は、それをも超えて、既製の枠を破る用語を追い求めてやまなかったのであろう。

俊頼に顕著にみられる上述のごとき意識と態度によってもたらされた注釈および詠歌は、彼の個性や能力に負うものであるという面がみとめられよう。ただ、贈答歌において、歌学上問題になる語が好んで詠み込まれてたことからも窺われるように、俊頼にみてとれる意識や態度は、ある程度当時の歌人たちに共通するものであり、その背景にある時代相のなかで、俊頼の注釈行為や詠歌も可能であったことを確認しておきたい（19）。

このようななかで、詠み出される歌は、「けけらなく」の例に顕著であったように、結果的に注説との間に矛盾を来してしまう場合もあった。こうした逸脱をも招きかねなかった、俊頼の注釈および詠歌は、やや後代の清輔、顕昭たちによってしばしば批判されることになる。たとえば、第三節に取り上げた「波たてる」の俊頼歌について、顕昭は『詞花集注』において、「くもで」を『俊頼髄脳』の記述と照合しながら解釈した上で、これは『伊勢物語』に言う「くもで」とは「オホキニタガヘリ」とする、批判的言辞を記している。清輔、顕昭の俊頼への批判は、直接にはその注説や詠歌の内容に関するものであるが、それは、俊頼の注説、詠歌の根底にある上述のごとき意識や態度が、もはや彼らにとって理解し難いものになっていたという、

姿勢の相違が存することに起因する場合があるのではないか。別稿（注17に同じ）で「かはやしろ」の論争を取り上げ、清輔、俊成、顕昭たちの時代における、注説と実作の関係を述べておいた。彼らの当時、十二世紀後半の歌学にあっては、歌ことばの意味について、正しい説を得ることが最も重要であったらしく、ときとしてこれが家の意識と結びつき、家説の対立という事態（20）を招いたようである。そこでは、もはや、信頼関係の上に立ちながら、難義語を詠み込んだ歌を交わして、知的応酬を試みるというような雰囲気は失われつつあったと思われる。注説と実作との関係を眺めていくとき、十二世紀の初めとその後半とではそれを支える意識、態度が移り変わっていることが見通せると思うのである。第六節に掲げた俊頼が「もずの草ぐき」を詠み込んで顕季に贈った歌について、清輔『奥義抄』に「将作これを見て、もずのくさぐきとはいかにしりてかくはよめるにかとかたぶかれけり」と、俊頼は「もずの草ぐき」をどう理解して詠んだのか顕季が不審がっていたということが記されている（21）。顕季が俊頼歌に対して批判的であったことを示しているが、これが、清輔によって採られた記事であることに留意する必要があるだろう。これは、あくまでも清輔の耳目を通して記された顕季の態度であるということである。前述のような事情を考慮すると、こうした批判的言辞は清輔や顕昭によって殊更に吸い上げられる傾向にあったであろうことが想像される。清輔、顕昭の著述は当然のことながら、彼らの水準でなされたものであり、彼らの俊頼やその時代を見る眼は、俊頼の当時の水準とは異なっていたであろうことに留意すべきだと思うのである。

本稿で扱うことのできたのは、俊頼の注説と実作のうち一部のものに限られている。したがって、残された問題も多いが、院政期の前半と後半の間にみられる＜時代差＞への視点を問題提起的に示しておいて、稿を閉じることにする。

注

（1）『散木奇歌集』を含めて歌集類からの引用および歌番号は、『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。なお、歌番号のみで作品名を示さない歌は『散木奇歌集』からの引用である。

（2）『俊頼髄脳』の引用は静嘉堂文庫蔵「無名抄　俊頼」（五〇二―一九、烏丸光栄本）に拠り、異文注記等の傍書を（　）に入れて示し、国立国会図書館蔵「俊頼髄脳」（いわゆる定家本）で補った部分を〔　〕で囲んだ。なお、私に清濁を分かち、文意を明確にするために仮名遣いを改めたところがある。

（3）①「『俊頼髄脳』月のねずみ考―仏典受容史の一齣―」（『中世文学研究』六　一九八〇年八月）、②「『俊頼髄脳』と中国故事」（『中世文学研究』八　一九八二年八月）、③「『俊頼髄脳』の歌と語り」（『中世文学研究』九　一

九八三年八月）。

（4）①「『俊頼髄脳』の歌語と説話―〈異名〉からの接近―」（『日本文学』三五・一〇　一九八六年一〇月）、②「院政期の歌学と本説―『俊頼髄脳』を起点に―」（『日本文学』三六・二　一九八七年二月）、③「院政期歌学書の言語時空」（『日本文学』三七・六　一九八八年六月）、④「〈本文〉と〈今案〉―院政期歌学のディスクール―」（『古典研究』一　一九九二年一二月）など。

（5）①「ゑぐとせりの歌―平安後期注釈の問題として―」（『福岡大学人文論叢』二〇・三　一九八八年一二月）、②「「難義は難義にておきたればこそあれ」の意味―平安後期注釈の問題として―」（『福岡大学日本語日本文学』二　一九九二年一二月）、③「源俊頼の位置―平安後期注釈を座標として―」（『古典研究』一　一九九二年一二月）、④「歌学書と説話」（説話の講座3『説話の場―唱導・注釈―』　一九九三年二月　勉誠社）など。

（6）以下に示す頁数は同書に拠る。

（7）異名を列挙した部分と実作との関わりも検討を要するが、いまは俊頼がより主体的に採り上げた言葉について考察してみたいので、この調査では異名の部分は対象から外した。

（8）後に問題にする「仏」との関わりからいえば、「まことの儀式」に仏事が含まれないとは断言できない。しかし、当時「幡」と「旗」の区別は明確であったようで、ここでは日本古典文学全集本の橋本不美男氏の注にしたがって理解しておく。

（9）阿波国文庫旧蔵本は第三句「かさりにて」で、関根慶子・大井洋子『阿波本　散木奇歌集　本文・校異篇』（一九七九年七月　風間書房）に拠れば、「かきり」とするのは国会図書館蔵岸本由豆流旧蔵本の一本のみ。本文に問題を含む。なお、この歌は冷泉家蔵本（冷泉家時雨亭叢書）には無い。

（10）「唯獨自見抄」の三本（松平文庫・宮内庁書陵部・彰考館蔵）では、これが本行にあり、「又」以下の文言を欠いている。

（11）橋本不美男氏は、『院政期の歌壇史研究』（一九六六年二月　武蔵野書院）に『国信家歌合』を検討するなかで、俊頼の判者としての立場と作者としてのそれが乖離していることを述べている（第三章Ⅲ「国信卿家歌合の意義」）。

（12）定家本の『古今集』では第三句「けけれなく」。第四句にも諸本間で異同がある。

（13）注（5）山田論文①。

（14）注（3）小峯論文①に詳しい考察がある。そのなかで、基俊歌「かたらばや」に触れて「基俊が俊頼に送った（5）歌（筆者注、「かたらばや」の歌）は両者における話自体の媒介を想像させる」と述べられている。

（15）この視点は注（5）山田論文④と重なるところがある。

また、注（4）小川論文②に「おそらく歌材の開拓のためには、新奇なことばだけではだめであったはずで、その語と由来（本説）とがセットになってはじめて機能したに違いない」と言うのも示唆的である。

（16）小川氏の諸論に説かれている〈本〉〈本文〉へのまなざしの問題が、詠作行為とどう関わっているのかを、筆者なりに検討していくことは、今後の課題である。

（17）「「かはやしろ」の論争をめぐって」（『名城大学人文紀要』四六　一九九三年一二月刊行予定）。

（18）注（3）小峯論文③に、俊頼が「そら事」「ひが事」としながら〈物語〉を記すのは、「語りの魅力」にひきずられているからであるとし、「語り」に熱中する俊頼の姿を描き出している。本稿の主旨からいえば、ここに、〈物語〉を実作へと絡め取っていこうとする意欲を加えて考えることができる。

（19）浅田徹「藤原仲実の類林和歌について」（橋本不美男編『王朝文学　資料と論考』　一九九二年八月　笠間書院）に、俊頼と同世代の歌人、仲実の著作にみられる一貫した志向を指摘して、その特徴を明らかにしている。このように、時代相をみるにしても、個々の歌人に個性が存することはもちろんで、留意する必要はある。

（20）ただし、この対立がまったく他家の説を受け付けないという単純な構図のものではなく、一元的に理解できないことが、東野泰子「定家歌学と六条家説」（『文学史研究』三三　一九九二年一二月）に説かれている。

（21）注（5）山田論文③などにも言及がある。ただし、注釈と詠作のかかわりについて、山田氏は俊頼の当時と清輔の当時とを一括してとらえているごとくであるが、その間に存する時代差を考えようとする本稿は、これと視点を異にすることになる。

〔付記一〕本稿の内容の一部は、本年四月の名古屋平安文学研究会における発表に基づいている。席上、貴重な御教示をいただいた方々に深く感謝申し上げる。また、俊頼髄脳輪読会において資料提供と御教示を賜った会員諸賢にも厚く感謝申し上げたい。

〔付記二〕本稿は平成五年度文部省科学研究補助金（奨励研究A）による成果の一部である。

（さとう・あきひろ　名城大学専任講師）